

ポテトウ・キングの印象

有馬 頼寧 ありま よりやす

馬鈴薯ばれいしょといえは堅過かたすぎぎるし、ジャガイモといえは俗過ぞくすぎぎて、今ではポテトウと呼ぶのが一番わかり易い。これも米化べいかの一つの現れかも知らないが、ここに書くポテトウ・キングもアメリカでの話で日本での呼稱こしやうではない。牛島謹爾きんじという人が、當時アメリカでポテトウ・キングと呼ばれた人なのだ。

明治四十三年の七月、農科大學きやうの業を卒おえた私は、一週間後に當時日本に於ける最大の客船天洋丸に乗ってアメリカに向った。一行には原農科大學教授と、山崎延吉氏の外にも一人居た。約二週間を要してサンフランシスコに上陸したが、其時そのとき迎えてくれた何人かの日本人の中に、當時日本人會長をしていた久留米出身の牛島謹爾氏が居た。アメリカに長く居たためかも知らないが、写真でみられるように、日本人としてその容貌ようぼうが外人に近く、如何にも世界人という感じをうけた。

牛島氏の印象を書くには、私は牛島氏の前歴を少しも知らないので、久留米

在住の石野義助氏に調べてもらった。同氏の報告をここに掲げ、次で私の牛島氏の印象や當時の思出を書きたいと思う。石野氏の書簡は次の如きものである。



牛島謹爾の肖像（45歳）
在米日本人会の会長就任時

【牛島謹爾】牛島彌平の子にして元治元年一月、三猪郡鳥飼村字掛赤（現今の久留米市梅満町に属す）に生る。夙に上妻郡（現今の八女郡）北河内村江崎巽菴の塾に入り漢籍を修め、後東都に遊び高等商業學校に學び、不幸病に罹り、未だ業を卒えずして空しく歸郷せしも、雄心抑え難く、明治二十一年憤然北米に渡りたり、時に年廿五、爾來彼の地に在りて専ら勞働に従事したるが、容易に成功の曙光を認むること能はざりき。

ここを以て郷國にある兄覺平を招き、兄弟力を協せて業を勵みしも成績

意の如くならざりしかば、一旦歸郷したり。然れども百難を排して初志を貫かんと欲し、數月にして再び渡米し、功成らずんば復郷土の地を踏まずと決心し、カリフォルニア州なる白人の農園に雇はれ、約三カ年間或は豆を播き、馬鈴薯を植え、僅少なる賃銀を得てその日を送りつつありしが、或日同氏方稀有の大洪水に襲はれ、白人等の經營せる農園は、一朝にして大荒蕪地となれり。よって白人等は連爾兄弟に其開墾を依頼せり。

然るに此事業頗る順調に進み、若干の荒地を自己の所有となして、盛に馬鈴薯を栽培しその得る所の利益を以て、更に土地を買収し農園を作る。此間白人の壓迫を受け、苦心慘憺の後、益々馬鈴薯畑を擴充し、遂に米國加州に於て四萬ヘクター（四萬町歩）の廣闊なる一大農場となし、年々收穫百萬俵の多額に上り、市價を左右するの實力を有し、世に馬鈴薯王と謳はるるに至った。

大正四年功勢によって勲五等に叙せられ大正十五年三月二十七日歸郷の

途次急患に罹り客死す。更に勲四等に叙せられしが、時に年六十三歳なりき。諱爾文學を好み、字は細郷剔天と號す、常に恩師江崎巽菴に對し書を寄せて禮を怠らず、時の詩の添削を乞へり、云々。

ハワイに上陸したときも日本人が多勢いたし、カリフォルニアに渡っても、日本人が多勢いるので、何となく心丈夫な感がした。殊に牛島氏を始め同郷の人達に迎えられた時は、初めての海外旅行者として嬉しかった。ところが牛島氏が私を丁寧に扱ったために、同行の原先生の感情を害し、私が間にはさまって困ってしまった。

牛島氏の家は桑港ではなく、スタクトンにあった。それは經營している農場に便利だからと思う。島丸という牛島氏所有の船で川を下ると。フレスノ河口に近く幾多の大きな三角洲があって、そこに牛島氏の農場があるのだが、三角洲の周囲を高い堤防で囲み、中は丈餘の葦が生い茂っているのを、見たこともない大きなスチーム・ブラウで掘り起していた。こうした農場が幾つもあるの

だが、そこには簡単な事務所があり、又働く人達の宿舎がある。そこに働いている日本人は、多くは郷里の人達であった。

農場の事務所に一晚泊り、夜働く人達の相撲を見せてもらい、私もとうとう飛び出して仲間に入ったが、私などの力の及ぶ人達ではなかった。負けた上に、あとで輕はづみだというて先生に叱られたが、牛島氏始め郷里の人達は、私を迎え、又私の輕はづみな態度をいやしみはしなかったと思う。

牛島氏の家にも泊めてもらったが、明治四十三年といえは私は二十七歳だったし、牛島氏は私の父と同年だったから、その頃は四十七歳位だったと思う。その頃十歳位の可愛い娘さんが居て、寫眞をもらって歸ったので、今もどこかにある筈だが、その娘さんも今は五十歳になっていよう。現在どうしているかわからない。

一九一〇年だから第一次欧州大戦の始まる前だが、噂さに聞くと。ポテトウ栽培もその頃はあまり好況ではなかったようだ。後になって聞いたことだが、

欧州大戦の影響でそれから事業も賑い、好況を迎えたようだ。

長い年月の間には、好況の時もあれば不況の時もあるのだし、殊にこうした大規模な経営をしていれば、好況の時はいいが不況の時の痛手も亦ひどいらしく、或年の如きポテトウの価格が暴落したので、牛島氏が自分の生産したものの相当量を海に捨て、それで価格の暴落を防いだことさえあったと聞いた。

私が今迄に會った人の中で、一番好きな顔、浦山しいと思った容貌の一人は牛島氏だ。人間の顔というものは目、鼻、耳、口というものが、其用を為せばよいのなら配列はどうでもよい筈なのだが、顔というものは其人の持っている内面的なものを表現しているところに重要さがある。従って政治家、實業家、藝術家とそれぞれ特徴がある。成功者というものは、その人のもっている内容と仕事とがうまく合致している場合だと思う。

牛島氏の顔を見ると事業家として最も勝れた才能なり度胸なりを持っているように見えた。こうした容貌の人は政治家として無論勝れた才能があるが、藝

術家としては必らずしも適才ではなからうと思う。一九一〇年に會ったきり、再會する機會がなく、郷里に家を持たれたこともあるが六十三でなくなったのは惜しかった。こういう人が日米の間にあって努力したら、日米戦争なども避けられたのではあるまいか。

私の郷里にも數學の權威として知られた有馬頼懂、明治維新の志士の中心人物であつた眞木和泉、明治の初期機械の發明を多數残した田中久重、それにこの牛島氏などおるが、何れもが偉大ではあるが表面的に名聲をあげたり、華々しく世にもてはやされるといふ種類の人は少い。軍人、政治家にも幾多の人材が出てゐるし、實業家としては石橋氏兄弟の如き人もあるが、どちらかといふと堅實な仕事振りで虚名を唱われた人が出ない。これは久留米地方の自然が極めて静かであり、物産も久留米絰や、傘のような地味なものであるための影響とも考えられないこともない。青木繁、坂本繁二郎の兩氏が、あまり表面的でないのも同様なことだと思ふ。郷里の人達は他の土地の人に比べれば會う機會

も多いから、印象を書くには都合がよいのだが、多過ぎるために反^{かえ}って書きにくいし、殊に現存する人は避けた方がよいように思われるので、牛島氏を選んだのである。

ひとりごと

非売品

著有馬頼寧 責任編集有馬頼義

刊行昭和三十二年四月一日

印刷小泉印刷株式會社發兌作品社

【著作者紹介】有馬頼寧^{よりやす}は米藩有馬

家の十四代目、明治四十三年東大

農学部卒、同年七月米欧視察旅行、

伯爵、貴族院議員、

昭和十二年農林大臣就任、

昭和十四年農林大臣退任、

昭和三十年日本中央競馬會理事長、

(明治十七年生、昭和三十二年没)